れんさい小説(4)

一男一女

桜井利枝
絵／辻司

涼子を和彦に会わせようとしたまち子の気持を、妻の佐久子に対する意地悪だと、和彦は言った。そういう意識が全く無かったと、まち子は自分でも考えてはいないが、涼子に対する床しい心に嘘はなかったわけで、その思いがほぼ裏切られなかったことに、彼女は満足した。

（それにしても、〝お花が私に近づいてきてくれた〟とは、なかなか上手い言い方をしたものだわ）

人生の転機を見出すきっかけになった情況を、涼子がそのような言葉で表現したことが、特にまち子の印象に残った。

人は何かに縋らねば生きて行けないものだが、仕事だけでは埋められない空虚感を、花と向きあい、花の心を我が心として表現する作業の中に、涼子は自己の救いを求める端緒を得たということなのであろう。

翻って、まち子は自分の現在と、行く末のことを思うのである。

さいわいに五十数年の生活は、概ね順調であったと、まち子は考えている。戦争を境として、日本人の殆んどが経験した転変の余波を、まち子も勿論かぶってはいるが、その波に溺れることもなく、取り残されることもなく、何となく身をまかせているうちに、当時としては比較的恵まれた結婚をし、やがて一男一女を儲け、夫との間も、円満と不仲との周期を何回となく繰り返した、言わば平均的な主婦の一人であった。

しかし夫が死に、息子とも別居して、一人暮らしの生活を続けていると、まち子はもはや自分が、主婦という役割をうけもった女でないことを、折にふれて思い知らされるのであった。肩書きのない、ただのおばさんなのである。

彼女もまた、人生の転機を摑まねばならない女の一人と言えるかも知れない。

まち子は夫や子供との平穏な生活のなかで、長い間、余生ということばの持つ、消極的な老後生活をしか頭に置いていなかった自分に、深い悔恨をおぼえていた。

近頃、老年にかわって熟年という呼び方が頻りに用いられるようになったのも、より積極的に生きようとする人々の願望の表れであろう。この好ましい風潮に、取り残されないようにしなければならないと、まち子は思うのである。

（と言っても、私はさしずめ何をすればいいのだろうか）

和彦に相談をしてみたが彼は、そんなことは自分で考えよと言わぬばかりに、真面目に取り合ってはくれなかった。

まち子はぐったりとして、和彦と涼子が去った座敷の、煌々とした電燈の光の下で、かなりの間坐りつづけた。

（二人はどのようにして帰ったのだろうか）

今夜十数年ぶりに会った二人は、お互いに相手に対してどのような感情を抱いたのか、まち子は気になっている。何らかの意味で和彦が、一人で生きている涼子の力になってくれればと思うのである。

涼子が大方は片づけてくれたのだが、まだ少し残っている食器類を、ともかくも流し台に運んで、ストーブの始末もし、顔を洗って自分の部屋へ入ったのは、十二時近くであった。

鏡台にむかって肌の手入れをしようと、何気なく腰を下ろしかけた時、腰椎のあたりに、俄かに激しい痛みが走った。ここしばらくは忘れていたのであるが、数年前からおぼえた腰痛が、またおそってきたようである。やがてはこれが慢性化するのではないかと、まち子は不安な思いに取付かれた。彼女は洋服のまま這うようにして、やっとの思いで寝床に躰をすべり込ませた。

翌朝は上体を起こそうとすると、まだこりこりした痛みが残っているので、日射しが高くなるまで横になっていた。これくらいの痛みだったら、以前のまち子なら無理をして起き出したものだが、此頃はだんだん気概が軟化しつつあるようである。

こういう日は誰かから電話でも架かってくれば、うっとうしい気分も少しは晴れるのであるが、皮肉なもので、午後になっても何のおとないもなかった。

まち子はそろっと起きて、救急箱からプラスターを出し、数枚を患部に貼りつけた。直ちに消炎効果があらわれ、しばらくのうちは痛みが和らげられた。

彼女は遅い昼食をとると、娘の悦子に電話を架けた。腰の痛みのことは言わないつもりだったが、向うから此頃はどうかと聞かれ、そうなると黙っていられないまち子は、堰を切ったように細々と病状の説明をはじめる。

「もっと早くわかっていれば、今日行ってあげられたのに」

悦子は頻りに残念がっている。

「明日チイちゃんを休ませて、朝から行くわ。じっと寝てなさいよ、お母さん。今夜のお食事は、お寿司でも頼んだらいいわ」

「それ程しなくても大丈夫。お菜は冷蔵庫にあるもので間に合うのよ」

やがて電話口に、幼稚園へ通っている孫娘が出て

「おばあちゃん。どうしたの」と、

可愛い声でたずねる。まち子は思わずほろりとした。その幼女に口調を合わせ

「おばあちゃんね、イタイイタイなのよ」

と哀訴する。そのようなやりとりが、まち子の気分をくつろがせるのに、大いなる効き目があった。

翌朝、悦子は夫を会社へ送り出すと、子供の手を引い

て、ラッシュ時の電車を乗り継いでやって来た。直線距離にすればそれ程遠くはないが、電車なら二時間近くかかる。こういう時、車の運転が出来たらと、悦子はくやしがった。

彼女は早速エプロンを着けて掃除にとりかかった。まち子は無理に寝床へ入れられ、その枕元で孫娘がちょこんと坐っている。

座敷のバラの花束を見つけて、悦子は

「どうしたの」と聞く。

まち子は涼子に再会したことや、家に招いたことを話すと、悦子は昔の涼子を少しは知っているので

「へえ、あの人がねえ」

と、多少驚いた風であったが、それ以上の関心を示さない。他人のことには余り好奇心を沸かせない性格で、その点まち子とはだいぶ異なっている。

昼食はまち子の好物を中心にした献立がととのえられた。その頃には彼女も床を離れ、久しぶりに悦子たちとの食卓を囲んだ。

孫娘のちひろはなかなかのおしゃまで、母親の悦子が閉口するようなことを言っては、まち子をびっくりさせた。

「パパは、俺に似たから頭がいいんだって、勝手に決めてるのよ。来年から何かお稽古ごとを始めさせるんだって、一人で張切ってるわ。親馬鹿なんだから……」

悦子は嬉しそうに話す。

「小学校も、出来ればS女学院の小学部へ入れたいって、言うんだけど」

S女学院は、まち子の家からは私鉄の駅を一つ隔てただけの近距離にある、有名なミッションスクールである。

「まあ、手回しがいいこと」

まち子は呆れている。ちひろはまだ四才で、小学校入学は二年先のことである。

「でも遠すぎるじゃないの。こんな小さい子を、可哀そうだわ」

まち子が心配すると、

「もし、この家へ移って来たら、だけど」

「あら、そうなの」

先日悦子が、お母さんが淋しければ、自分たち家族が同居してもいいと言った、裏の意味が漸くまち子にも呑み込めた。

「で、あんたはどうなの、Sへ入れること……なかなか高くつくんでしょう。男の子ならともかく、あんまり無理しない方がいいと、私は思うけど……」

所謂教育ママ的積極さなど、持ち合わせていない悦子である。

「私は別にどっちでもいいのよ。パパが張切っているので、もしそうなればいいと思ってるだけよ」

と、至極のんびり構えている。

「あんたたち夫婦は、世間とは逆なのね」

悦子の夫のそういうところを好かないまち子は、多少の皮肉をこめている。

「そうみたい」

悦子は素直に認めて笑っている。

「おばあちゃんと、何日になったら一緒に暮らすの、ママ?」

ちひろは真剣な眼差で悦子を見据えている。悦子はどう答えていいか分らないらしく、黙っている。まち子も曖昧に笑いながら

「それはまだわからないのよ、チイちゃん」

と返事するしかなかった。

しかし、まち子は面白いと思った。悦子の娘をS女学院へ入れるなどという発想は、今の今まで考えてもみなかったことである。せめて中学部へ入るくらいの年令なら、子供だけ同居させることも考えられるが、小学生の面倒をみるのは、もうまち子には無理である。

近頃肥りだして、スカートが合わなくなったと嘆く悦子に、躰がよくなれば普段のものを縫ってやると言って、まち子はメジャーを持って来て寸法を採った。悦子

の体型は肥っているせいか、まち子よりも老けた感じである。
「何か、スポーツでもなさいよ」
とまち子は奨める。
「お母さんは、趣味を見つけたの」
やんわりと逆襲してくる。
「此頃俳句をやる人が多いわよ」と悦子。
「そうね」
それはまち子も考えないことではない。もし俳句の勉強をするなら、夫の旧友で三十年くらいのキャリアを持つ、その人に頼めばよいと思っているが、何故かもうひとつ気が進まないところがある。それなら涼子さんにお花を習えばいいとも、悦子はすすめる。それにも曖昧なまち子に
「何でも、思い切って始めなきゃ駄目よ」

珍らしく悦子はきびしいことを言った。
まち子は悦子の夫の申出でに対して、近い内にはっきりした態度を示さなければならないと思った。
夕方和彦から電話が架かった時、まち子は手洗いに居たので、悦子が受話器を取った。彼女は母親の容子を和彦に話し、今夜は念のため泊るつもりであることも付け加えた。
和彦は「じゃ、頼むよ」と言っただけで電話を切ったが、夜になると妻の佐久子と子供を連れて見舞いにやって来た。ちょうど夕食を済ませてから、悦子がピアノを弾きちひろが歌う、小さなコンサートが応接間で開かれている時であった。
佐久子は渋い大島紬の対の着物を、きっちりと着こなしていた。
「一昨日うかがった時は、あんなにお元気にしていらっしゃいましたのに」
さも不思議そうに、まち子の腰のあたりに目を配っている。悦子は先夜の会食に佐久子も加わっていたと感違いして
「お嫂さんたちが帰られて、そのあと痛みだしたらしいのよ」
と言い、まち子をぎくりとさせた。
「佐久子さんはお昼に来たのよ。夜のお客さまは、私の友だちなのよ」
何とか言い逃がれるまち子の顔色に、悦子もやっと察しがついたらしい。
「あ、そうだったの」
と恍けている。和彦も知らぬふりである。佐久子には全く通じていない。
「悦子さん、ほんとうにすみませんでした。私の方がずっと近いのに、知らなかったので何もお世話をしなくて……」
佐久子はこういう場合、長男の嫁としての務めを、特に意識するのである。和彦も同じように悦子をねぎらう。

「そんなに言ってもらわなくてもいいのよ。お母さんは、私のお母さんでもあるんだから、当然のことをしただけよ」
悦子はあまりいい感じがしないと見える。
和彦は
「明日は朝早くから佐久子を来させます」
と言うが、今日は掃除や洗濯いっさいを悦子が済ませ、食品も二三日分は買込んであるので、さしあたっての用事はない。それに痛みも多少楽になっているので、簡単な食事の用意くらいは、まち子一人で出来るのである。
「じゃ、午後から来させるよ」
まち子は敢えて断わらなかった。
翌日はピアノ教室の稽古日なので、佐久子が来たのはちょうど好都合であった。まち子は悦子が帰ってからは、また寝床に入った。躰を温かく保っておく方が、やはり楽なのである。
佐久子は気を使って、果物や温かい飲物を、まち子の枕元に運んで来た。彼女はまち子の気分を慮って、子供を実家に預けてきたのであるが、もっと重度の病人ならともかく、今のまち子は、むしろ子供が運んでくる騒々しさを歓迎したい心境なのである。
(もし佐久子の実母が病臥した場合、彼女は子供を私に托すだろうか)
この程度のことは疾っくに割切っていた筈なのに、まち子はつい余計なことを考える。
「佐久子さん」
ちらかっていた枕辺を片づけて、佐久子が部屋を出て行こうとしている背へ、まち子は声をかけた。
「はい」
振り向いた佐久子の、アイシャドウの濃い目が、不自然に笑っていた。これは他人の目だと、まち子は思った。
佐久子は無論彼女の娘ではない。その点ではあくまでも他人である。しかし母と長男の妻という関係には、もう半歩の接近があってもいいのではないかと、まち子は思う。
「あなた、この家へ帰って来るのは嫌?」
突然の質問に、佐久子は当惑している。
「本当のこと言ってちょうだい」
「嫌だなんて、そんなことはありませんが、これは私一人のことではありませんので、和彦さんの気持もお聞きになって下さい」
このような場合の返答を予め考えていたかのように、佐久子は落着いていた。
「言っとくけど、この家を売るようなことは、私は絶対反対よ」
これはむしろ和彦に向かって吐く言葉である。佐久子は心外だと言わぬばかりに、表情を固くした。
「私は、そんなことを言った覚えはありません。うちのマンションで空部屋が出来たので、父が買っておこうかなと言ったのを、和彦さんがお母さんのためにって…」
そういう経緯を聞かされていなかったまち子は、咄嗟に言葉に詰まった。
佐久子の父は近く事業から身を退き、長男に全てをまかせる積りだという。両親がマンションへ隠居するかどうかは未定だが、もしそうなった場合の、和彦の受ける精神的圧迫感を、まち子は想像した。
「でも、父はあの家をよう離れないと思いますわ。事業からもどれだけ引退できるか、その時にならなければ分らないって、兄は言ってますもの」
まち子は、そうであることを、和彦のために祈らずにはおれない。
夜になれば彼も姿を見せることになっている。この際同居のことを、三人で話し合うべきではないかと、まち子は思ったりもする。
応接間で弾かれている聞き慣れた練習曲が、これまでとは異なった響きを、まち子の耳に送りこんできた。
(つづく)

壁の穴情報　VOL-1（その2）

壁の穴ならでは……の明るい雰囲気を貴方も味わってみませんか？
私たちスタッフは、皆様のお越しを心よりお待ちいたしております。

東京・渋谷　　スパゲティ専門店

Spaghetti 壁の穴

＜三宮店＞

中央区三宮町１－５サンロイヤル神戸10Ｆ（さんプラザ）
ＴＥＬ 078－332－4551
営業時間11ＡＭ～９ＰＭ　第１・３月曜休

※７月２日京都店がオープンいたしました。四条河原町高島屋７Ｆ。京都におこしのせつは是非お立ち寄り下さい。

連載小説 第五回

福の神

秋吉 好

絵／岡田 嘉夫

前回までのあらすじ
故京は次第に寂れてきた。坂東の叛乱は西に広がり、九月末に追討使が下向した。左馬頭行盛は後陣で六波羅に滞在した。彼は定家に平中納言の居場所を伝えた。定家は病弱を押して嵯峨中院を訪ねた。しかし、女は会わなかった。

五、都還り

権亮少将維盛が福原より近衛府に着いた。馬寮にいた行盛は彼を出迎えた。維盛はわずかの郎等を率いているだけだった。縹色の直垂に萌黄匂の鎧をつけて、相変らずの美丈夫だったが、平一門の正嫡として輝く未来を担っていた頃とちがって、落魄の感は避けられなかった。彼が富士川の戦場から京都へ逃げ帰ったのは十一月五日のことだった。数万におよぶ武田や兵衛佐の大軍に対して、官軍は五千騎にもみたなかった。闘う前から勝敗はあきらかだった。しかも、いざ敵軍と川を挟んで対峙したときには、味方はわずか二千騎に減っていた。半分以上は逐電したか寝返ってしまった。維盛は、それでも、軍を進めるつもりでいた。ところが、侍大将上総守忠清をはじめほとんどのものは撤退しか考えていなかった。維盛は仕方なく軍を退いた。その途中、千越の館が焼失し、追討軍は総崩れになった。郎等はわれ先に自領に逃げ帰り、上総守までも勝手に伊勢の所領に走った。維盛が夜陰に乗じて入洛し、検非違使忠綱の館に着いたときは、わずか十騎だった。彼は馬允満季を福原に送ったが、入道相国は激怒して評定にかけた。

「主上は、今日、御出門されました。明後日には入洛されます」

還幸に先立って上京した維盛が福原の様子を伝えた。

「二十六日ではなかったのですか？」

「その予定でしたが、源氏が勢多まで迫っているというので、早まりました」

維盛は思ったよりも元気だった。根が誠実な人だけに、混乱の責任が自分にあると思い詰めて、一時は再起を危ぶまれるほどに消沈していたが、さすがに小松大臣の嫡男としての矜恃が、彼をふるい立たせていた。追討使の失敗を嘆いている暇はなかった。

「二十日にも、飛騨守景家殿の郎等が、勢多で弓を射られ、大橋に首を晒されたと聞きます。近江は、いまや完全に、源氏方におちました」

維盛は、左馬頭の新しい情報に、驚きの色をかくさなかった。

「今朝も福原で、蔵人が自宅に火を放って東国へ逐電しました。伊丹の武者所が追って行ったそうですが」

「手引きするものがいて、どうやら逃げられたようです。後ほど六波羅へ帰りますので、そのとき詳しいことが分るでしょう」

維盛は、今度の戦いで、家人といえども信用できないことを、いやというほど知ったことだろう。福原を棄てるにあたって、郎等をいったん所領に返し、六波羅に再結集する方針がとられた。長期化する戦争の不満をやわらげる懐柔策だが、このうちどれだけのものが集まるかは不明だった。還都に反対するものも多くいた。

「今さらあれこれ言っても無駄ですが、私には還都の儀がどうしても納得出来ません」

行盛は心の煩悶を維盛に伝えた。還都が戦略上の手段にすぎないといっても、それはあきらかに旧勢力に対する屈服であった。郎等の不満はここにもあった。

「平一門の都は和田新京しかありません。源氏が京都を侵したとしても、主上も院も福原におられるのですから、何の痛手もこうむることはないはずです。それを」

「私が富士川で負けたことが、源氏に勢いをつけてしまった」

維盛は苦痛に顔をゆがめた。傷はまだ癒えてはいなかった。

「私はそんなことを言っているのではありません。あの軍勢では、だれが追討使を拝命しても、闘いにはならなかったでしょう。禅門もよく御存知です。結局、頼朝の

力を軽んじたことが原因です」

行盛の言葉に、維盛は腕を組んで俯いた。行盛はそんな維盛があわれになった。追討使の坂東下向と前後して、厳嶋や宇佐に参詣して、戦勝と和田新京の造営を祈願してきた入道相国の怒りは当然であったが、その責任の多くは、急場凌ぎのわずかな混成軍を率いた維盛よりも、坂東の勢力を甘くみた福原の大将軍宗盛にあった。しかも、経験の乏しい維盛に、侍大将として上総守忠清をつけたことが、討征軍に大きな混乱をもたらした。忠清は宗盛の信用を笠に着て、追討使をないがしろにした。福原出向が二十日あまりも遅れ、六波羅でも十死一生の日を忌むという口実で一週間近く留まった。頼朝は、追討軍が手間取っている一ト月の間に、たちまち息を吹き返し、東国十一ケ国を掠領してしまった。

行盛は、追討使の出発が遅れたことや、上総守を侍大将にしたのは、宗盛の謀略かも知れないと疑っていた。たしかに、維盛の統率力に問題はあったが、それも忠清の協力がなくてはどうすることも出来なかっただろう。宗盛は、追討使に足枷をはめることで、自己の基盤を鞏固なものにしようとした。ところが、追討使の失敗が予想以上のダメージを一門にもたらしたことに驚いて、あわてて還都を断行したのだ。入道相国は、還都を要求して騒ぎ出した比叡山の大衆と源氏が結びつくことを恐れて、宗盛の説得に応じざるを得なかった。

「自分たちの都を棄ててしまって、どうして戦に勝てましょう。京都にもどれば勝てるというものでもありますまい」と、行盛はなおもこだわり続けた。

「私がいる間、福原では、毎日のように嵐になりました。冷たい潮風が吹きつけるので、新院は、ますます、弱られました」

「しかし、せっかく内裏も出来たのに……」

行盛も、新院の容態を出されると、黙らざるをえなかった。福原に愛着以上のものを持つ行盛の気持が、維盛にもよく分った。彼は郎等の不満を代弁していた。しかし、決定されたからには、それに従うしかなかった。

行盛は大内裏から六波羅に向った。都大路はいつにない活況を呈していた。人馬の往来も頻繁で、市も賑やかだった。人々はすでに還幸が始まったことを知っていた。行盛は生き返ったような町の様子が不快だった。自信を取りもどした市人は、無遠慮に、馬上の左馬頭を見ていた。

四条から京極大路に出たとき、多くの人が高札の前に集まって騒いでいた。一行が近づくと、難を恐れて、そこを離れ、遠巻きにした。三宅富雄が馬を進めた。平氏を誹謗する落首だった。富雄は主人に告げるまでもなく、従者をうながして引き抜いた。坂東追討使の失敗は平一門の権威を失墜させた。福原遷都の憂さをはらすかのように、揶揄や嘲笑の落首や今様がもてはやされた。水鳥の羽音におどろいて追討使が逃げ帰ったなどという立札が都のあちこちに立てられ、狼藉は西八条の門前にまで及んだ。「清盛法師を誅殺すべし」という高倉宮の令旨と称するものから、福原炎上の噂まで、様々な流言蜚語があとを絶たなかった。源氏を待望する声も表立って来た。

行盛は馬を早めた。身内に怒りが渦まいていた。それまでに感じたこともなかったような大きな時間の流れにながされているといった不安があった。それに和田新京が押しつぶされて、維盛や宗盛はおろか入道相国までも呑み込まれてしまう。

行盛は、大路にたむろする下人を蹴散らしながら、鴨川をこえた。六波羅に入る手前の街道で、二三十騎の左兵衛督知盛の郎等に出会った。彼らは山科から戻ったばかりだった。罪人を一人捕えていた。

「どうした?」と、行盛がたずねた。

「手嶋蔵人の従者かと思われます。道に迷って、水車小屋にひそんでいるのを、つかまえました」

行盛は馬を下りて従者の所へ行った。まだ年若い男だった。頭をうなだれてふるえていた。髷に泥がこびりつ

いている。顔をあげさせた。おびえ切った空ろな表情をしていた。左目を打ったらしく青染んで腫れている。鼻血が黒く固まっている。これから自分がどうなるかも分らずに、ただ顫えている。

しかし、行盛は、何の抵抗する気力もない従者を見ていて、新たな怒りにかられた。市人と同じだった。一人では手向う力もないのに、相手の力が弱まると、確実に刃をふりかざしてくる。衰弱して道傍にねころがっていても、動物的な鋭さで、死んだばかりの躯から、衣服すら剝いでしまう。そんな狡猾さを従者にも見る。平氏の敵はここにもいた。たとえそれがどれほど卑小な存在であっても、決して許すことは出来なかった。

「切ってしまえ」

と、行盛は言い放った。武士たちはおどろいて左馬頭を見る。いつもはその優しさに不満を抱いていた富雄が唖然としている。

「待て、私が切る」

行盛は、ためらっている武士に代って、太刀を抜き払った。郎等は、取るに足らない小男を切るという左馬頭に圧倒されて、黙ってながめている。富雄も面喰って止めるのも忘れている。

行盛は半身にかまえて従者を見据えた。男は白刃を前にしても驚くことはなかった。行盛の心を空しさが横切る。彼は、一瞬の逡巡を自ら断ち切るように、刀を振り下した。血潮がぱっと散った。男の首が実に緩慢に地面に落ちた。声もなかった。おびえたままの表情が固定して、足下をころがった。

定家(さだいえ)が読書に倦んで南縁に出ていたとき、大夫忠信が庭に入って来た。

「入道様に叱られましたね」

と、慎重な忠信には珍しく軽口をきいた。彼も浮かれた気分になっているのだろう。

「あの人は平氏が嫌いだからな。おかげで、勉強がはかどるよ」

定家も機嫌よく応じた。彼は、主上や新院を出迎えるために、六波羅に出かけようとして、俊成入道に止められ、夕方から部屋に籠っていた。

「健御前様のことがあるので、心配なさっているのです」
「しかし、私は侍従ではないか」と、定家は不服そうに言った。
坂東追討使が逃げ帰った頃、入道相国と前右大将宗盛が激論して、入道相国が折れて還都が決定されたという風聞がながれた。故京に駐留する平氏は次第に数をふやし、源氏や高倉宮に近い人たちが京都を離れた。高倉宮の妹前斎宮も摂津国貴志荘にかくれた。一緒に付いて行こうとした健御前は、父入道の強い反対で、家にもどされた。同じころ、嵯峨中院の平中納言も姿を消した。
「主上はいつ着御されたのだ？」
「今日の午すぎ、前大納言邦綱様の五条第に着かれました。昨夜は、大風で、三嶋江に逗留され、沈んだ船もあったと言います。そのために、夜陰の装束をつけたままで、おおよそ信じられないくらい貧相な行幸でした。なにしろ、供奉の公卿様が、中納言成範様と別当の時忠様の二人だけなんですから」
忠信の報告を聞きながら、定家は溜息をついた。還都というだけで嬉しくて、それほど行幸が惨めなものとは思いもしなかった。
「本院も、同じころに、六波羅の泉殿に入られ、新院はずっと遅れて、夜になって、池殿に着かれました。よほどお身体がわるいらしく、輿を下りられるときにも、女房の肩につかまり、抱きかかえられながら、屋形に入られたそうです」
定家はかるくうなづいて庭を見た。晩秋の前栽は荒々しかった。葉を落した糸のもつれたような小枝が、大火のときのような明るい夜空に這っていた。中門廊の上に細い月が出ている。ときどき、夜がうなるように、鬨の声が聞こえてきた。六波羅や八条に駐屯する平氏の軍隊が、夜を徹して、逆賊に備えている。主上や院をむかえて、大いに志気が上がっているのだろう。
「明日はどうしても行かなければならない」
定家は、新院の病状を気づかって、強い口調で言った。
夢にも考えられなかった還都が現実のものとなって、欣喜雀躍としていたのに、その背後には犠牲が隠されていた。新院のことを思うと、気が重くなった。
「あの方のことが、漸く、分りました」
忠信は、恐ったような顔をしている定家を気づかいながら、小声で言った。
「あまりよい知らせでは有りません。あの方は淡路の所領におられるということです。福原の対岸の松帆の辺りかと思われます」
「わかった。もういいよ。終ったことだ」
と、定家は自らに言い聞かせるように言った。手をふって、忠信を追い払った。
織月が、六波羅の篝火を映したようで、赤くて気味悪かった。二ケ月ほど前、夜中に六条院の辺りを逍遙していて、天中に鞠ほどの光の玉が飛び、たちまち破裂して、夜闇に散じたのを見たことがあった。自然は人の世の変異を逸早く伝えるものらしい。しかし、あのころはまだ、女に望みをつないでいた。それが、嵯峨中院で自尊心まで傷つけられ、職務も充分に果せないほどに苦しんだ。女のことは、彼にとって、もはや痛みでしかなかったのだ。先日も、七瀬御祓の使いで、閑院殿に参じたとき、立蔀もはずれ、雑草の手入れもされずに放置されているのを見て、この荒廃がやがて都中に及ぶのかと思うと、いても立ってもいられなかった。他の故京のように京都が草に埋もれてしまえば、とても生きては行けない。和田新京は海に面した明るい都だと聞いていても、波の音さえ恐ろしげで、移る気にもならない。定家はいまさらながら、自分が都人であると思った。それなのに、一門がもどってきたのと入れ替わりに、平中納言は京都を棄てて淡路へ行ってしまった。わたしはもはや平氏の人間ではありません、と言った女の覚悟に嘘はなかった。定家は、一度は憎いと思った女が、憐れでならなかった。

（つづく）

★神戸っ子トラベルコーナー

★チューリッヒ・パリ・ロンドン11日間
日程／12月26日～1月5日
費用／¥349、000
募集人員／15名
大阪→シンガポール→チューリッヒ→パリ→ロンドン→シンガポール→大阪
チューリッヒ～パリ～ロンドンは一等国際列車で。また、パリとロンドンでは2日間ずつの自由行動
お問合せ・お申込みは**ドッドウェルトラベルサービス**（神戸市中央区磯上通8－3－7　明治生命ビル）☎251－0025

★イタリア周遊とパリ10日間
日程／第1便11月11日～20日
第2便11月20日～29日
費用／¥295、000
募集人員／35名
OP／A、ベルサイユ宮殿半日観光　B、ロワール河畔の古城巡りC、パリイルミネーションとナイトツアー　D、ナポリ・ポンペイ終日観光　E、チボリ半日観光

フォーブル・サントノレ通り

大阪→パリ→ミラノ→ベニス→フィレンツェ→ローマ→大阪
お問合せ・お申込みは**大丸トラベルサロン**（大丸神戸店6F）☎331－8121　担当／大畑

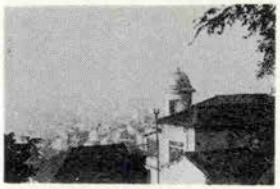
★ハッピーニューイヤーハワイ6日間
日程／12月29日～1月3日
費用／¥335、000
大阪発着、ホテル・市内観光付
★天国にいちばん近い島・ニューカレドニア8日間
出発日／毎週水曜日
費用／¥228、000
大阪発着、ホテル・市内観光付
お問合せ・お申込みは**トップナッチ**（中央区琴緒町5グリーンシャポー2F）☎242－2695

★お正月ハワイ6日間
出発日／1月3、4、5日
費用／3日発¥198、000
4、5日発¥188、000
大阪発着、市内観光付
OP／ハワイアンナイトショー、シーライフパーク、ハナウマベイ
一日コース、パールハーバークルーズ、サンセットクルーズ、ポリネシアン文化センター、カウアイ島、マウイ、ハワイ島めぐり
お問合せ・お申込みは**近畿日本ツーリスト**神戸海外旅行営業所（交通センタービル2F）☎391－2401

★奥大井のSLと寸又峡温泉1泊2日
出発日／11月5、6、8、12～15、19～22、26～29日
費用／おとな¥224、200
こども¥113、900
休前日発の場合、おとな¥2、600、こども¥1、500増し
コース／第1日新神戸→京都→浜松→金谷→千頭→奥泉→寸又峡温泉＜泊＞
第2日寸又峡温泉→奥泉→千頭（SLかわね路号）→金谷→浜松→京都→新神戸

★秋の帝釈峡1泊2日
出発日／11月1～3、7、8、21、23、28、29日
費用／おとな¥222、400
こども¥114、500
休前日発の場合、おとな¥1、100、こども¥800増し
コース／第1日新神戸→姫路→福山→鞆の浦（自由観光）＜泊＞
第2日鞆の浦→神竜湖（自由観光）帝釈峡めぐり）→福山→新神戸
お問合せ・お申込みは**三ノ宮駅旅行センター**　☎221－0190

talk and talk


＜神戸っ子愛読者サロン＞

★友人に神戸在住の者がいる関係で神戸とは縁もゆかりもない私ですが毎月楽しく読ませていただいています。特に表紙を開けると飛び込んでくる西村功氏の神戸のスケッチなどは見つめるだけで神戸の香りがするようであのような風景のある街をうらやましく思っております。息子がまだ手の離せない年令ですので近々というわけにはいきませんが何年か後、主人と2人きりでゆっくりと神戸の街を歩いてみたいと思っております。それまでに歴史ある建物や緑の場所が取り壊わされたりしないことを祈りつつ。

＜高砂市／山崎ひとみ＞

★8月より出張で神戸に来ています。先日、書店で「神戸っ子」が目にとまり早速読ませていただいたところ、その内容の豊富さに驚いております。すでに通算245号も出版されているとのこと。こういった雑誌が日本のすべての街に一冊ずつ出来るようになればどんなにか楽しいだろうか、と思いつつ残り少なくなった神戸での日々を実り多いものにする為に休日などは六甲の山々などを歩き回っております。

＜北九州市／大野幸雄＞

★先日、所用のためポートピア'81の期間中とはまったく異った世界が展開していた。ただ広い博覧会場跡地にはパビリオンを取り壊す槌の音だけが響き三宮へ走るポートライナーには数名の乗客しか見ることが出来ない。その一方で博覧会期間中は余り目立たなかった建設中のビルの回りには大型のクレーン車が轟音をたてて走っている。この人工島の成功、不成功はこれからなんだという気持を一層強くもった。本当にこれからなのだ。この島は。＜西宮市／中元好信＞

★先日はポートピア'81でサンバ祭りに参加させていただき楽しいひとときでした。ありがとうございました。子供が写してくれました写真も若返ってとれており、うれしくなりました。ロンドンにも持ってきましたのヨ。やっと二週間が過ぎましてあんまりあっちこっち出歩いたものですから一年以上住んでいるような気持になりホーム・シックにかかりそうです。ウインザー城に行きました。郊外はニュージーランドによく似ていて、初めてのお国には思いません。楽しいデパートやヨーロッパの有名店がたくさん並んでいる通りもあり、ぜひ神戸っ子で来年はツアーを作ってください。楽しみにしております。

The Royal Family

＜ロンドン／わたなべやすこ＞